

まちの昔ばなし

昔ばなしで、まちの魅力を再発見

皆さんは、昔ばなしといえば、何を思い出しますか
かぐや姫や桃太郎といった日本のものから
グリム童話やイソップ物語といった海外のものまで、
語り伝えられた、昔の人からの大切な贈りもの

遠賀郡・中間市にも
皆さんのおじいちゃん、おばあちゃんが語り伝える
人間味あふれる昔ばなしがあり
今の子どもたちにも
伝えていきたいものばかりです

今回の合同企画では
各市町の昔ばなしを一つずつ紹介し、
皆さんを不思議な世界へいざないます
それでは、昔むかし、あるところに…



不老長寿のほら貝

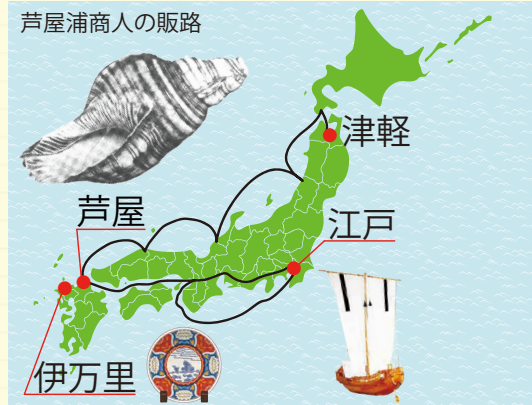
天明^{てんめい}2（1782）年、芦屋浦の商人の男が伊万里焼を仕入れて、奥州まで売りに行きました。

ある日、津軽の山中で道に迷い、小川のほとりで洗濯をしていた女に一夜の宿を頼みました。男が「筑前芦屋のものだ」と名乗ると、女は「私も筑前のものです」と言って懐かしがり、男を自宅に案内しました。女は食事と酒で男をもてなしながら、身の上話をしました。「私は筑前山鹿のそばの庄ノ浦の海女の子です。私が庄ノ浦にいた頃、山鹿秀遠^{やまがひでと}さまが安徳天皇さまをお迎えして、山鹿の東に仮の御所を構えられました。私は、磯のものを取って時折御所に差し上げていました」。



ほら貝を祠に納める女

その話の内容は600年も前のことで、男は驚きました。女が言うには、「私が病気になったとき、子どもが大きくなほら貝を取つてきたので、それを食べると病気が治りました。年をと



芦屋浦商人の販路

らなくなりしました。それは不老長寿の薬だったのです。やがて家族が年老いて死別した後は、豊前^{ぶんぜん}、豊後^{ぶんご}、四国から山陰へと旅に出て、農家の主人の妻になりましたが、年をとらないので化け物かと怪しまれ、そこを離れました。

それから各地をめぐってこの津軽にきて今の主人の妻になりましたが、またここにも居られなくなるのではないかと心配です。そして「ほら貝の殻は、庄ノ浦を出るとき、船留めの松のそばの小さな祠^{ほら}に納めました。帰ったらそれを探して私の子孫に私の話を伝えてほしい」と男に頼みました。男は芦屋に帰って庄ノ浦の祠で貝の殻を見つけ、女の子孫に会って約束を果たしたそうです。このほら貝の殻は、現在、北九州市若松区乙丸の貴船神社に祭られており、毎年4月に「ほら貝祭」が行われています。

一夜で咲いた菜の花畑

広渡にある八剣神社のお話です。村人たちは毎朝お参りするのが習慣で、古くなったお社^{やしろ}を見ては、「早くどこ修繕せんばならん」と言っていました。

ある年の春、大雨で遠賀川の堤が切れそうになり、お社が流されては大変だと、村人たちはお社に集まり、夜も眠れずに守っていました。みんなの願いが通じたのか、次の日は、からりと晴れわたりました。川原の中には、上流から流されてきたものが流れ着いています。

「ひのき丸太だ！これはきつと神さまのお恵みだ。この材木で古くなったお社を建て直そう」

村の人たちは、流れ着いたひのき丸太を全部引き上げましたが、流れ着いた材木は上流のものだから、役人が調べに来るはず。そこで近くの畑を掘り、そこに丸太を埋めましたが、その畑は、誰の目にもわかるほど、新しい土の色をしています。その時、見知らぬ

顔の美しい娘が「そこに菜を植えてはどうでしょうか」と言いました。

それはいい思いつきだと、今度は菜の苗を移し替え、立派な菜畑に変えました。そして、無事にお社が建て替えられるように、村の人たちは八剣神社に祈りました。

次の日、役人たちがひのきの丸太が流れ着いていないか調べにやってきました。丸太を埋めた畑はどうなっているでしょう。

なんと、畑は一夜のうちに黄金色の菜の花畑に変わっていたのです！

「おー、なんと立派な菜畑じゃ。この村の者たちは働き者じゃのう」そう言い、役人たちは何も見つけることなく、通り過ぎていきました。

ほどなくして、それは立派な八剣神社が建てられたということです。村では、この日を毎年「万年願^{まんねんがん}」として、お祭りをするようになりました。



八剣神社（遠賀町広渡）の境内



高倉さまとコブの源助



高倉神社の連続する赤鳥居

糠塚^{ぬかづか}から山一つ越えた尾崎村に、源助という正直者がおりました。

ある日、突然に源助の耳の下にコブができてしまい、どんどん大きくなって赤ちゃんと同じくらいの大きさになってしまいました。

いろいろな医者に診てもらったのですが、治らないので産土神^{うぶすまがみ}の高倉さまに願掛けすることにしました。それからというもの、源助は日も昇らないうちに身を清め、休むことなく毎日毎日お参りをしました。

その姿に村のみんなは「こぶ取りじいさんの話は知らんのか。神さまじゃなくて、鬼に取ってもらわな」と笑っ

ていました。

お参りを始

めて数カ月たった頃、源助はコブが取れた夢を見ました。起きると耳の下のコブは変わらず、がっかりしてしまいました。しかし、その日も欠かさず、高倉さまにお参りに行きました。

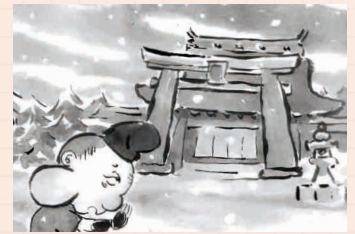
お参りの帰りに石段でコブのあたりがヒヤツとし、おかしいこともあるなあと首をかしげた源助でしたが、そのまま泉のそばまで来ると、いきなりコブからおびただしい水が流れてきました。

源助がコブのあったところを触ると跡形もなくきれいに治っていました。小躍りして喜んだ源助は、再びお礼参りをして神主さんに「コブを治してもらったお礼に毎月境内を掃除させて」と願い出しました。

それから源助は毎月欠かさずすることなく、十年も二十年も掃除を続け、それに感謝した高倉村のみんなは源助を神社の祭りごとを補佐する社家^{しゃけ}にとりたてその労に報いました。

「正直の頭に神宿る」

誠の心を持って正直に世渡りをする人間には、必ずいつの日にか神さまの加護があるというお話です。



カッパの証文



中間唐戸のせきの水門付近

昔むかし、遠賀川の水をひいた堀川にたくさんのカッパがいました。

夏になると、このカッパたちが堀川で泳ぐ子どもたちを水底にひきずりこむので、里の者たちは、

「こりゃ、ひとつ、里のみんなんで堀川のそうじばせにゃあ、らちがあかん」

「そうじゃ、カッパ退治たい」
そう話し合い、堀川のせきどめの相談に庄屋さまのところへ行きました。

そうした騒ぎが続いた、ある蒸し暑い夜のことです。

堀川のせきの番人のとめさんが唐戸のせきでたばこを吸っていると、子

どものような声だったので、あたりの暗やみに向かって、たずねてみました。

「だれかな、耳なれん声じゃが」

「わしら、こん堀川にすむカッパどもの頭としてお願いにきました。なんでもあすから、せきどめぼしてわ

しらを退治はするちゅうことですが、そればかりはお許しください。こん

ごはいっさい村の子どもたちを水の中にさそいこまんど、かとうちかいおうて、ここに一通の証文ばもって

きとるとです。どうか、よろしゅうにたのみます……」

と言うとすぐに、ドボン、ダブダブ……と水音をたて、声も姿も消してしまいました。とめさんの足もとには、まぎれもない一通のわび証文が置かれていたのです。

——ひとふで、おねがいもうします。わしらいちぞくのもの、きょうより、こどもとむすめを、かわのなかへひきこむこと、あいやめます。よつて、ほりかわのせきどめは、おやめくださいませ。ほりかわ、かっぱいちぞく。——

今でもこの証文が残っているそうですが、さて、どうでしょうか。

文…「中間市史」を一部改変



やまとたけるのみこと
日本武尊と砧姫

昔むかし、熊襲との戦いのため大和朝廷の「日本武尊」が九州に来た時、船を遠賀川に乗り入れ、水巻町の立屋敷の中州で長旅の疲れを癒やしていました。

尊が水辺を歩いていると、どこからともなく、「トントン・トントン」と砧を打つ音が聞こえ、その音を頼りに、あしの茂みをかき分けていくと、一軒の粗末な家がありました。不思議に思った尊は、娘に声をかけました。娘は「砧姫」といい、「もとは都で宮中に仕えていましたが、わけあって都を離れ、この地で暮らしています」と話しました。かわいそうに思っ



絵：佐藤幸乃著「砧姫物語」より



跡には社を造り、祀つたのが八劔神社といわれています。

た尊は、姫に自分の身のまわりの世話をさせていましたが、いつしか、二人は好きになり、愛が生まれました。熊襲との戦いが終わり、尊と姫は立屋敷の館で幸せな日々を送っていましたが、尊には東国の蝦夷との戦いの知らせがあり、都へ帰ることになりました。楽しい幸せな日々は短く、別れる時がきました。尊は、大切な愛の印に、一本のイチヨウの苗木を植えて、大和の国に帰りました。この樹が、今の八劔神社の大イチヨウとされています。

それからまもなく、姫は砧王を産みました。姫と我が子と思う尊の愛が伝わり、イチヨウの樹は大きく育ち、枝には母の乳房を思わせるコブがいくつもできました。いつの頃からか、その皮を煎じて飲むと乳がよく出ると広まり、近くの村々から、お母さんたちが皮をもらいに訪れていました。尊が住んでいた立屋敷の館



高倉神社の本殿 (岡垣町)



八劔神社 (遠賀町) の昔話石碑



貴船神社 (若松区) にある鳥居右側奥の標柱のあたりにほら貝が納められていました



八劔神社 (水巻町) の大イチヨウ



中間唐戸のせき

okagaki

onga

ashiya

mizumaki

nakama

私たちの住む遠賀郡・中間市の昔ばなしはいかがでしたか。紹介した話の中には、なじみのある神社や樹木、遠賀川などが登場する地域ならではののおもしろさがありました。

これらの昔ばなしは、長い年月、親から子へ、地域の年長者から地域の若者へと何世代にもわたり語り継がれ、途絶えることがなかったものです。

今回は地域に伝わる昔ばなしの中から、各市町の広報担当者 が1話ずつ選んで掲載しましたが、このほかにも紹介しきれなかったものがたくさんあります。興味のある人は、それぞれの図書館や資料館、ホームページなどで調べてみるのもおもしろいかもしれません。そして、昔ばなしの舞台になった場所を「聖地巡礼」のように訪ねて、雰囲気味わうのもおススメです。

今回の特集は、広報担当者にとっても、昔ばなしから町の過去をのぞく良いきっかけになりました。昔ばなしを読んだ皆さんも次は語り手となって、「この話の場所はあそこかな」などと話しながら、周りの子どもたちにかかせてあげてください。

おしまい

遠賀郡・中間市広報担当者一同